18 世紀フランスにおける「他者表象」
～ロション師のマダガスカル旅行記を読む

Une représentation des autres dans la France au XVIIIe siècle : analyse d'un mémoire du voyage à Madagascar de l'abbé Rochon

高橋　暁生
Akeo TAKAHASHI

Résumé

Aux XVIIe et XVIIIe siècles, la France a essayé à plusieurs reprises de prendre pied à Madagascar, afin de maintenir ses influences dans l'océan indien même après la défaite en 1763, sans aucun succès cependant. Cet article a pour but de contribuer à l'exploration de la diversité des Lumières relatives à l'idéologie coloniale et à la "mission civilisatrice" dans la deuxième moitié du XVIIIe siècle, en analysant un mémoire du voyage d'un clergé-astronome français, Alexis Rochon.

D'abord, dans son *Voyage à Madagascar et aux Indes orientales*, publié en 1791, en comparant, dans toutes les parties de l'ouvrage, Madagascar comme sauvage avec les nations européennes ou la France comme civilisées, il jette toujours un regard critique sur tout ce qui concerne la civilisation européenne, sauf son industrie et ses arts. Ensuite, Rochon rejette toutes les sortes de colonisations soit violentes ou même "douces", celles-ci promues par des philosophes des Lumières, Guillaume-Thomas Raynal, le comte de Maudave, Pierre Poivre ou des physiocrates, par exemple. Enfin il insiste plutôt sur la nécessité de réaliser le commerce entre Madagascar, un pays riche des produits naturels et des ressources matérielles, et les pays européens, dont la France, qui possèdent les sciences exactes et les arts utiles, développés

en Europe.

はじめに

> 原住民の知的、精神的な改良と、彼らの生活条件改善のための実際的な知識を豊富にすること、これらを目的に教育を組織化することは、医療的な援助とともに、彼らを物理的に満足させ、この植民地を支配する国民が、支配されている人々からの好感を勝ち得、こうした支配は彼らにとって利益のあることなのだと理解させるために用いる最も強力な手段の一つをなすのである[1]。

19 世紀後半、とりわけ第三共和政を迎える前後の時期から、フランス政府は主にレユニオン島に住むプランテーション経営者や大商人らからの求めに応じるかたちで、マダガスカルへの介入を本格化させ、この島への進出をめぐって長年争ってきたイギリスの干渉を 1890 年のザンジバル協定によって排除した上で、植民地化を進めていく。1894 年末から開始された第二次フランス・メリナ戦争は、翌 1895 年秋にはフランス軍の勝利に終わり、10 月 1 日にマダガスカルはフランスの保護領となることが決定し、翌年 8 月には植民地として併合された。この一連の征服を成功裏に導いた「英雄」が 1896 年にマダガスカル総督となったジョゼフ・ガリエニ将軍である。1905 年 4 月 、彼はそれまでのマダガスカル植民地化の経過とその成果をまとめ、本土の植民地大臣に宛てて実に 740 ページに及ぶ浩瀚な報告書として提出している。冒頭に引用したのは、マダガスカルでフランス植民地政府が実施してきた教育政策の全容を述べたあとのまとめとして書かれた一節である。

一見して明らかなように、ここに現れるのは宗主国としての傲然たる姿である。前世紀にジュール・フェリがフランスの植民地拡大を正当化するために持ち出した当時は、「文明化の使命論」はかろうじて植民地化の「目的」として位置づけられていたが、20 世紀初頭のガリエニにおいては、もはや建前としてすら目的とはされておらず、あからさまな帝国主義的野

1　Joseph Gallieni, *Madagascar de 1896 à 1905, Rapport du Général GALLIENI, Gouverneur Général, au Ministre des Colonies (30 Avril 1905)*, Tananarive, 1905., p.335.

心を果たすための手段として認識されている。この時期こうしたスタンスはガリエニに限ったものではない[2]。

「文明化の使命論」の起源の一つは啓蒙思想である。ミシェル・デュシェの古典的研究が明らかにしたのは、一般に宗教的ドグマからの解放、寛容と自由、人間の諸権利のための戦いとして理解されてきた 18 世紀啓蒙が、文明化の諸計画の必然として植民地の拡大を支持したという点であった[3]。しかし、ダミアン・トリコワールは近年の論文の中でデュシェの仕事に敬意を払いつつも、19 世紀後半以降のフランス植民地主義の起源を、根本的に 18 世紀啓蒙と結びつけることに警鐘を鳴らす[4]。18 世紀啓蒙の論者それぞれの主張が持つ多様なニュアンスに注意を払うべきだというのである。本稿は、アレクシ・ロション（Alexis Rochon）という聖職者が 18 世紀末に刊行したマダガスカルとその近海への航海を記録した旅行記を取り上げ、これを当時のフランスにおける一つの「他者表象」として読む試みである。そこを糸口にして、啓蒙とその後の植民地主義とを結ぶ単線的な理解に若干の揺さぶりを加えることを目標とする。

第 1 章　近世におけるインド洋航海の時代背景とアレクシ・ロション

マダガスカルとヨーロッパの関係は 16 世紀にポルトガル船が島北部に漂着したことから始まる。このあとオランダもマダガスカルに到達するものの、本格的な拠点を築くにはいたっていない。この島での継続的な足場を作ったヨーロッパ勢力はフランスが最初だった。

16 世紀までのフランスは宗教戦争をはじめとするヨーロッパでの紛争に忙殺されていた。国内の安定とともに 17 世紀に入って重商主義の発想が王権に影響を与え始めたことが、フランスの海外への膨張が本格化する背景である。そしてリシュリュが 1642 年 4 月に東インド会社を設立してこの海域への公的な介入を始めた時、すでにマダガスカル島の植民地化が

2　例えば Jules Charles-Roux, *Exposition Universelle de 1900, Colonies et Pays de Protectorat: Exposition de Madagascar*, Paris, 1900. ; Jules-Gaston Delélée-Desloges, *Madagascar et dépendance*, Paris, 1931.

3　Michel Duchet, *Anthropologie et Histoire au siècle des Lumières*, Paris, Albin Michel, 1971.

4　Damien Tricoire, “Les Lumières, l’idéologie coloniale et Madagascar. Aux origines de la mission civilisatrice”, dans Pascale Pellerin (dir.), *Les Lumières, l’esclavage et l’idéologie coloniale. XVIIIe-XXe siècles*, Classiques Garnier, Paris, 2020., pp. 85-98.

明確な目標となっていた。ジャック・プロニス（Jacques Pronis）、エティエンヌ・ド・フラクール（Etienne de Flacourt）といった人物により主に島南部のフォール＝ドファンを中心に植民地化事業が進められるが、1664年のコルベールによる東インド会社の改組以降も主に現地住民の激しい抵抗に遭い、一時的な撤退を余儀なくされる。マダガスカルが再び本土の強い関心を呼ぶのは、七年戦争に敗れてインド植民地の大半を失ったあとである。第一にイギリスの勢力膨張を前に、インド洋海域におけるフランスのプレゼンスを維持する政治的な目的を指摘できよう。すでに1649年に領有を宣言していたブルボン島（現レユニオン島）とスペイン継承戦争後に獲得したフランス島（現モーリシャス島）は依然としてインドへの航路と同時に、その先の東アジアへの航路を維持するためにも不可欠の重要拠点であり、この二島を軍事的に防衛するための前線基地としてマダガスカルの再開発が期待された。第二にフランス、ブルボン両島で展開されているコーヒー、サトウキビ、インディゴ、原綿などのプランテーションを維持するには大量の奴隷が必要であったが、元々無人島であった両島にとって、特にインド喪失以降は、奴隷供給地ないし奴隷貿易の中継地としてマダガスカルの重要性は増した。最後に両島の奴隷を含む住民の食糧供給地としてもマダガスカルは重視された。フランスはかつての拠点フォール＝ドファンはもちろん、北東部のアントンジル湾やフルポワント、サント＝マリ島、南西部のサン＝トギュスタン湾などを新たな拠点としてこの島の植民地化に再度踏み出すことになる[5]。旅行記の著者ロションがインド洋への航海に旅立ったのは、ちょうどこの頃のことである。

ロションはブレストの軍人の家に1741年に生まれた。17歳の時に父を失いやむなく聖職の道に進むが、特に母方の実家がモルレの有力なネゴシアンだったこと、また大貴族ラ・ロシュフコ公爵（Duc de La Rochefoucauld, Louis-Alexandre）とのつながりもあり、定住、司牧の義務を免除されながら高い収入を保障される空位聖職録を受け、自身の関心のおもむくまま自然科学の研究に没頭できる環境を手にする。ブレストの王立海軍アカデミーやパリの科学アカデミーに所属し、ボルダ、カシーニ

5　近世フランスの海外進出とインド洋海域における動きについては Bernard Gainot, *L'Empire colonial français de Richelieu à Napoléon*, Armand Colin, 2015.

あるいはコンドルセといった当代一流の知識人と交流し、1795 年のフランス学士院設立メンバーにも名を連ねた科学者、知識人である。とりわけ光学距離計を発明したり、顕微鏡、望遠鏡の工夫、八分儀やマリン・クロノメーターなど航海技術の改良などにも足跡を残す光学、天文学の専門家であったことが、彼をモロッコ（1767 年）や南インド洋（1771 年）といった非ヨーロッパ世界への航海に導くことになる[6]。

1768 年 3 月 19 日にロリアン港を出発したラ・ノルマンディ号に乗り込んだ彼に課されたミッションも、やはりその専門性が期待されてのことだった。目的地であるフランス島を中心とするインド洋海域の航路調査が当初の主要な任務であった。1769 年 5 月にはマスカレーニュ諸島海域の岩礁調査と最短航路の開発に臨んでいる。既述のように、もちろんこうした調査には七年戦争後のフランス王権の思惑が背景にある。実際、この海域の調査を命じられたのはロション以外にも複数確認できる[7]。ロションはその生涯で光学や数学に関する専門書を数冊刊行しているが、本稿で取り上げる旅行記『マダガスカルと東インド海域への旅行』（以下『旅行記』と表記）[8] は中でも際立った成功を収めた。1791 年の初版から 1804 年までの間にフランス語と英語で 2 版ずつ、さらにドイツ語でも出版された。管見の限りでは 19 世紀に出版されたマダガスカル関連の書籍には、しばしばこのロションの著作が引用されていて、この時期のフランスにおけるマダガスカル観に一定の影響力を持ったと思われる[9]。

本書の構成を概観しておこう。1768 － 69 年にかけての航海から出版まで 20 年以上のタイムラグがあることからもわかるように、ロションは自身の直接の見聞に加えて、航海の前後に出版された様々な文献や資料を利用しながら本書を完成させている。まず冒頭に「序言」が 65 ページにわ

6　ロションの生涯については以下の論文が詳しい。Danielle Fauque, “Alexis-Marie Rochon (1741-1817), savant astronome et opticien”, *Revue d’histoire des sciences*, tome 38, n° 1, 1985. pp. 3-36.

7　例えば天文学者グルニエは調査報告を兼ねた回想録を後に出版している。J. R. Grenier, *Mémoire des campagnes de découverte dans les mers de l’Inde*, Brest, 1787.

8　L’abbé Rochon, *Voyage à Madagascar et aux Indes orientales*, Paris, 1791. 本稿では初版を分析に用いる。なお、本稿におけるこの史料を典拠とする記述にはその箇所に（　）で初版の該当ページを示すこととし、いちいち注を設けない。

9　例えばPaul Ackerman, *Projet de voyage à Madagascar, pour y continuer des travaux d’histoire naturelle, de philologie et de topographie médicale*, Paris, 1838. ; Henri Pouget de Saint-André, *La colonisation de Madagascar sous Louis XV*, Paris, 1886.

たって続く。これは、基本的にフランス島とブルボン島を含むマスカレーニュ諸島やマダガスカルの近海を航行する船舶のための航海上の注意事項である。天候の特徴、岩礁の位置、海流の性質などが詳細にリポートされており、ロションの公式ミッションの成果はこの「序言」に凝縮されている。別言すれば、つづく本編はミッションとは直接的関係はないにも拘わらず、320 ページ超を費やして書かれた。まず「マダガスカル島詳解」ではこの島の歴史や動植物相、農工業や水産業、生活様式、慣習や宗教、民族的特性について説明する。次に「マダガスカル南部について」(127 ページ)、「マダガスカル北東部」(106 ページ)、そして「マダガスカル北部に関する考察」(14 ページ) という 3 つのパートが続く。さらに付録のようにして説明付き植物リストが収録されているが、これは当時のフランス島の地方長官だったピエール・ポワーヴル (Pierre Poivre) の命を受け、ロション自身がマダガスカル北部で採集しフランス島に持ちこんだ植物の目録である。続いて「コーチシナ詳解」(24 ページ) が収録されている。前提となる説明もなく推測に頼らざるをえないが、インド洋航路維持を目的としたミッションが著者の念頭にあったことを考えれば、インド洋の先にあるコーチシナという遠地の魅力を紹介しておこうとしたのかもしれない。そして最後に上記植物目録の補遺が付属している。このように、本書は全体としてまとまりがあるものではないが、その点も踏まえた上で、まずは「文明化」についての考察から始めよう。

第 2 章　ロションにとっての「文明化」

ロションは、あくまで彼の意図するかたちにおいてではあるが、マダガスカルの「文明化」の正義を確信していた。この点で彼は明らかな啓蒙の子である。

> この遠方の地へ旅するヨーロッパ人よ、あなた方が「未開人」[10] と名付けたこの地の諸民族に、あなた方の持つ啓蒙と知識とを伝えよ。

10 ロションの使う sauvage(s) を本稿では「未開（人）」と訳す。他方 barbare(s) については「野蛮（人）」と訳すことにする。ちなみにロションはこの二つの言葉を意識して使い分けており、マダガスカル人を指して「野蛮人」と自ら呼ぶことは一度もない。cf. 中村隆之『野蛮の言説 差別と排除の精神史』、春陽堂ライブラリー、2020 年。

> 同じ種に属す者たちの間で強固に存在すべき正義、平等、愛情を彼らに示すことを義務と考え、そのための規範を持つべきだ。今世紀に生まれた啓蒙は、もはやこの聖なる義務を無視することを許さない。あなた方の祖先にとっても未知だったいくつかの真実について、あなた方が有している巨大な責務を忘れてはならない。精密科学と有用な技芸の分野であなた方が成し遂げた急激な進歩を彼らにもたらす義務を有しているのだ（pp.12-13）。

文明化を一面単線的に見ており、かつては未開状態にあった自分たちヨーロッパ人が文明化を遂げたように、後進のマダガスカル人にもそれが可能だと考えているようだが、単純素朴な「文明化の使命論」に見える彼のこの言明には若干の注意が必要だろう。ここで言う文明化はとりわけ「精密科学と有用な技芸」の伝達を指すのである。

加えて、彼は繰り返しヨーロッパないしフランスとマダガスカル人との間の「交易（commerce）」の重要性を説く。ロションはマダガスカル人による在地の「産業」の存在も認め、綿や絹、オウギバショウの葉の繊維で編まれた優れた繊維製品製造技術、また鉄などの金属を精錬する技術も持っていることを丁寧に紹介している。とはいえ、特に機械化の点で彼らの産業レベルはヨーロッパのそれとは比較にならない。マダガスカル人を「偉大なネイション」と呼んで、彼らの産業の発展のために「最近マンチェスタで発明されたばかりの綿紡績機」導入をはじめとした機械化、時間管理や分業の推進も含め、ヨーロッパの進歩的な産業技術をこの地に導入すべきだと提言する（pp.8-12, 110-115）。そして、その対価となるのは豊穣なマダガスカルの生産物や自然資源である。ロションは『旅行記』の各所で、マダガスカルの各地方が産出する農漁業、牧畜業の生産物、森林資源、鉱物資源を、それらを生み出す多様な自然環境とともに詳細に解説している（pp.4-7, 20-27, 100-104, 258-271）。この地の豊かな産品や資源は、ヨーロッパが「その最も有用な活用の仕方」をマダガスカルに伝える代わりに、ヨーロッパの産業と技芸に新たな富をもたらすだろうと述べる（p.8）。

マダガスカルとの対等な交易を通して、主に産業に関わる先進的な技術をもたらす物質的な「文明化」について、ロションはその正義を確信している。それでは文化や習俗、精神的な面についてはどうだろうか。象徴的

な事例を一つ挙げよう。17 世紀半ば、フランスの拠点フォール＝ドファン近く、南部マンドラレ地方の首長ディアン・マナングはこの地にキリスト教宣教のためにやってきた司祭エティエンヌと個人的な友情関係を結んでいた。司祭の宣教活動も容認していたが、自身が後宮に住まわせていた複数の女性たちとの性的関係を非難されるに及び、司祭に「警告」を与えている。

> この歳になって、宮廷にある私の幸福と喜びを君の意志に従って犠牲にしろと望むのか。この狂気を私は嘆く。人生の退屈を和らげるものを奪われている君に私は同情する。君は私に一人の女性と生きるならよいという。しかし、一人の女性を所有することがよいなら、なぜ多くの女性からなる後宮を持つことは悪となるのか。そこにいる女性たちの間には平穏と合意があるというのに。なんらか嫉妬の徴であるとか、憎悪の端緒をわれわれの中に認められるというのかね。否。すべての女性が善良で、全員が私を幸せにしたいと望んでいる。私は彼女たちの主人というより奴隷だよ。君のいう行動規範がそれほどまでに有用で必要だというなら、なぜフォールにいる君の同胞たちはそれに従わないのか。なぜ君は彼らにそれを守るよう強制するのか。彼らは君が話すことの利点や重みを私よりもよくわかっているはずなのに。友よ、私を信じよ。君を裏切るつもりはないのだ。私には、自分の習慣を捨て去ることはできない。それができるとすれば死ぬ時だけだ。私に従う者たちに対して君の熱意を実践することは許そう。同じことを私の家族と子どもたちに試みるのも構わない。ただ、もし君が自分の持つその掟の数々をわれわれの習俗や慣習に合わせていくことができない限りは、これらの許可はほとんど無意味だろうな（pp.71-73）。

ロションはディアン・マナングを「強い権力を持ち、勇気があり、才気煥発でおまけにフランス人にも融和的」と紹介し、当初はエティエンヌ司祭を最大限尊重して歓待したと述べていることからも、この首長に好意的なのは明らかである。このあと、エティエンヌが執拗にディアン・マナングの行動を改めるよう迫り、きわめて暴力的な行動に出たことがきっかけ

となり、エティエンヌが殺害され、ディアン・マナングが首長となっているこの地域の勢力とフランスとの軍事衝突にまで発展する様が描かれるのだが、ディアン・マナングを繰り返し賞賛する一方、エティエンヌについてはその「非妥協的」で「度を越した」態度によって自身の命を失うばかりでなく、この地域でのマダガスカル人とフランス人の間の関係を不安定にするという致命的事態を招いたと批判している（pp.81-86）。

おそらくロションも参考にしたと思われるフランス東インド会社の管理官スシュ・ド・レンヌフォールの『東インド史』を読むと、ディアン・マナングとエティエンヌ司祭の間の争いは事実で、争点が前者の後宮にあったことも間違いない[11]。しかしスシュによれば、ディアン・マナングは司祭を騙して毒殺している。ロションはこれに触れていない。また上記「警告」の典拠は示されず、おそらくロションの創作と思われる[12]。もちろん重要なことは彼の記述が事実か否かではない。創作であるならなおのことそこに著者ロションの意図が明瞭に表れると考えるべきだろう。一つは、一夫一妻を絶対視するヨーロッパのキリスト教的規範の相対化である[13]。ロションはここで、カトリック司祭の信仰による盲目と頑迷で執拗な態度を批判し、逆にマダガスカル人の聡明さや柔軟性を読者に認識させようとした。ヨーロッパの産業技術の先進性を自覚し、そのマダガスカルへの伝播の意義を確信する一方で、文化や習俗におけるヨーロッパの先進性には常に一定の留保をつけ、相対化しようとする。同種の事例は他にも確認できるのであり、ロションは精神的な「文明化」からは意図して距離をとっていたように見える。実はこの点は、「他者」としての「マダガスカル人」描写と、その反転としてのヨーロッパ、フランスという「自己」イメージのあり方と密接に関わる。

---

11 Urbain Souchu de Rennefort, *Histoire des Indes orientales*, Paris, 1688., pp.51-54.

12 ラザリスト会の宣教活動を記録した次の著作からも創作の可能性は高い。Nivoelisoa Galibert, *A l'angle de la Grande Maison*, Presses de l'Université Paris-Sorbonne, Paris, 2007., pp.106-107.

13 他の箇所を見てもロションが 1771 年刊行のブガンヴィルの旅行記を読んでいた可能性は高い。cf.『ブーガンヴィル　世界周航記』（山本淳一訳）（17･18 世紀大旅行叢書第一期第二巻）、岩波書店、1990 年。

第３章　マダガスカル人とヨーロッパ人、フランス人

ロションは、しばしばマダガスカル人を「未開人」として描く。彼らは生活に関わる事柄には関心を示すが、深い洞察を必要とする知識には無関心であり、生来の無頓着と無気力を特徴とし、長く一つのことに集中できない。控えめで気まぐれでかつ明敏でもある彼らだが、有徳でもなければ悪徳を身につけているわけでもない。彼らにとっては現在がすべてで、未来を懸念したりすることもないと指摘する（pp.15-16）。当時の「未開人」観の典型と言えよう。ただ、ロションは「未開人」としてマダガスカル人を紹介する際、常にその対極に「文明人」としてのヨーロッパ人を意識し、これを批判的に見ている。

> マダガスカル人は未開人として、自身が心地よいと思うことをする際絶対的な主人である。その自由を妨げるような障害も拘束もない。自身の同胞を傷つける可能性のあることを除いて、自身がしたいことをする。誰に対してであれ、その思考や行動を支配しようとする考えは、マダガスカル人の頭に浮かぶことはない。〔中略〕この点でこの島の人々はヨーロッパ人よりも賢い。ヨーロッパ人たちには、地上のすべての民族が自分たちのために、自分たちの意見に従って、自分たちの偏見のためにすら行動することを望むような冷酷な性質がある。〔中略〕未開人は自身の関心と欲望を、厳密に自身の生存のために必要なものを手に入れることだけに向けている。自然のもたらすものを穏やかに享受し、人間であるがゆえに必然的に起きる不幸を黙って受け止めている。文明化された人間の行動はこれほど理にかなってはいない。豪奢と徒食はそのむなしく間違った享受に至るし、それがまた新たな障害を引き寄せることにしかならない。抑制のきかない道楽と軽薄な趣味によって常に幸福への道から逸れてしまうことになる（pp.17-18）。

他方でロションはマダガスカルを言葉の厳密な意味での「未開」とは考えていない。すでに見たように、一定の水準にある「産業」の存在を認めていたし、別の箇所では地域ごとに異なる慣習で結ばれる固有の社会が存在することが指摘され、首長はたいてい世襲だが、時々選挙で選ばれる場

合もあるなどといった説明もされる（pp.20-22）。したがって、以上のようなマダガスカル人の描写は、やや過度に理念的な「未開人」を便宜的に持ち出したようにも見え、その目的はむしろヨーロッパ人の帝国主義的志向や奢侈への批判であったとも言えよう。

事実、各地域に生きる人々を具体的に観察する中で彼の目に映るマダガスカル人の姿は単純ではない。例えば、南東部のアノシ地方に住む人々の一部は読み書きもできる。1823 年にメリナ王国の君主ラダマ 1 世によってアルファベット表記の正書法が導入される以前、マダガスカル語はアラビア文字で表記されたが、ごく一部の人々が書いた歴史書、医学書、占星術の書もあると指摘される（pp.24-27）。彼らは「活動的で明るく、感受性が豊かで謝意を表現する人々であり、知性と才能も持っている」（p.35）。また彼らは一般的には婚姻関係を重視しており、特に男性は女性に対して横暴に命令することはないし、女性が奴隷状態におかれていることもなく「両性間に権力のバランスが存在する」という（p.36）。他方、その社会には宗教的神話に基づいた厳格な身分差別があることを指摘し、これを「悲しむべき不条理」と表現する（p.34）。さらに、この地域の人々が持つ愚かな「迷信」の代表例としてロションが指摘するのが「オムビアス（Ombiasse）」と呼ばれる祈祷師／治療師の存在である。とりわけ愚かしく罪深いのは、オムビアスの祈りと判断にしたがって、人々が「3 月と 4 月、さらに各月の最終週、またすべての水曜日と金曜日」に生まれた新生児を森の中に捨て「獰猛な野獣の牙の犠牲にする」慣習であった[14]。しかし、ロションはマダガスカル人のこの慣習を一方的に非難するわけではない。「混乱した想像によってもたらされた妄想の中で未開人があらゆる種類の絵空事に依存し、懸念する危険から免れようとするのは意外だろうか」と書いて、自然がもたらす様々の脅威や不幸を前にして、その理由がわからない限り人はそれに恐怖し非合理的な祈りに依存すると指摘し、「無知が人間一般の悲惨を増大させ、光がそれを消し去る」と明言する。ここでも啓蒙自体への信頼は揺るがないが、同時に「こうした幻惑の精神によって引き起こされた無秩序の度合いが最も小さかったのは、必ずしも文明化された国々において、というわけではない」と「文明人」であるヨーロッパ人へ

14 このロションの記録はその後もマダガスカルの後進性を示す代表例として頻繁に引用された。例えば Delélée-Desloges, op.cit., p.73.

の警告も忘れない（pp.143-146）。そして、こうした迷妄を振り払うための教育の可能性にロションは言及する。

> マダガスカルに滞在している間絶えず私が経験から学んだことは、この島の人々にわれわれの持つ諸科学の正しい概念を与えることはほとんど難しいことではないということである。彼らに強い警戒心を抱かせたり、彼らを驚かす主要な諸現象について、その一般的な原因を彼らがいとも簡単に理解したことにびっくりさせられたものだ（p.149）。

こう指摘して、現在においては「ただ食べ物の心配をして、絶え間ない労働と強制された務めで手一杯」のヨーロッパ人よりも、豊かな土地に住み生活の不安を持たないマダガスカル人には学ぶ余裕と意欲があると述べる（pp.148-151）。

このように、マダガスカル人を理念的な「未開人」として提示する場合にせよ、より具体的な彼らの生活、文化、性質を紹介する場合にせよ、そこでは常に「ヨーロッパ人、フランス人との比較」が意識されている。それは島の北東部を対象にしたパートでも変わらない。

例えばロションはこの地域で行われている奴隷貿易について詳細に論じている。既述のように、18 世紀のマスカレーニュ諸島におけるプランテーション経営にとって、奴隷の供給は死活的に重要だった。もとは無人だったブルボン島の人口は 18 世紀に入ると急増するが、これは主に奴隷の増加による。1718 年から 1728 年の 10 年間に奴隷の数は 2 倍に増えたとされ、革命前夜の段階で総人口 45000 人のうち 37000 人が奴隷で、その大部分がマダガスカルから運ばれてきた。主に北東部沿岸に住むベツィミラサカ人と西岸地域に勢力を誇るサカラヴァ人が奴隷を売っていたが、この奴隷たちはモザンビーク海峡に面する大陸西岸からマダガスカルを介してアフリカ各地の住民が、またはマダガスカル島の内陸部で特にメリナ、アンドランツェそしてベツィレオといった諸民族が、それぞれ奴隷として集められ主にブルボン島に供給されていた[15]。

---

15 Gérard Naal, *Abrégé d'histoire de Madagascar*, L'Harmattan, 2016., p.25.

ロションは、1794 年 2 月の国民公会による奴隷制廃止宣言に通じる 18 世紀後半の反奴隷貿易、反奴隷制の思想的系譜の中にいる人物である。奴隷の境遇の悲惨さは論を俟たない。マダガスカル島からブルボン島への奴隷の供給を仲介する海賊船の卑しさも言うに及ばず、この海賊たちに奴隷を売り渡す主に北東部沿岸地域のマダガスカル人たちも、奴隷貿易から得られる利益に目をくらまされている。しかし結局のところ、こうしたサイクルの最大の悪は、コロンはもちろん、奴隷貿易が現地で生み出す悲劇の実際を見ることなく、遠地にあって最終的に最大の利益を享受しているヨーロッパ人であって、奴隷貿易に直接従事する海賊やマダガスカル人を批判する資格はないと断じている（pp.152-162）。

また、ロションは 60 ページ余りを費やしてハンガリー出身のモーリツ・ベニョフスキ男爵を取り上げている。ベニョフスキはフランス王権政府にマダガスカル島の魅力を喧伝し、この島の征服のためと称して王権から資金援助を獲得する。先述の、この海域をめぐる政治的思惑が王権の背中を押したのだが、ベニョフスキによるマダガスカル植民地化の計画は結局失敗する。フランスから見放された彼は、その後アメリカ・ボルティモアの商人から支援を得ることに成功し 1785 年に再びマダガスカルに戻るのだが、翌年、彼はフランス島から派遣されたフランス軍に殺害される。その後 1790 年に出版された彼の回想録をロションはおそらく読んでおり、ここからの直接引用も多数交えながらその言動を詳述するのである。日本にも訪れた男爵の半生は波瀾万丈であり、読み物としての面白さを自身の著作に加えるために設けた側面もあろうが、その基本的な主旨は、ベニョフスキと彼を一度は支援したフランスへの批判であった。「マダガスカル人たちの国を冒険者による略奪と専制に委ねた」と批難、マダガスカルでは交易は消滅し、かつて豊穣だった耕作地は不作に見舞われたのみならず、穏やかに暮らしていた人々の間には「不和と憎しみの種」が蒔かれたのである。これらの責任は最終的に、これまでも失敗を重ねてきたマダガスカル島の征服と植民地化という「危険な情熱」に扇動されたフランス人の側にあると批判した（pp.255-256）。

ロションの叙述は整合性に欠けることもあるが、マダガスカル人とヨーロッパ人・フランス人の両者を対比する構図は全体を通して一貫している。そしてこの対比の目的は、第一に後者への批判であった。もちろん第 2 章

で触れたように、「産業」と「技芸」におけるヨーロッパの先進性は高く評価される。しかしその精神性については、むしろ文明化の負の側面だけが強調され、そのマダガスカル人社会への浸食に強い警戒心を持っているように思える。一例を挙げよう。

ヨーロッパの優れた「産業」と「技芸」をマダガスカルに導入すべきだという彼の主張はすでに第２章で触れたが、そこに続けて、彼は一つの提案をしている。数人の若いマダガスカル人をヨーロッパに招いて「われわれの工業製品を生み出す産業に関する完全な知識を丁寧に教育したあと、彼らの祖国へ還す」というのである。ただしその際注意すべきことがある。それは「ヨーロッパを、そして特にフランスを荒廃させている軽薄さの精神からこの島の若者を護る」ことである（pp.13-14）。

ここでロションの批判の矛先はフランスで蔓延する「奢侈」に向かう。農村地帯では無数の人々が貧窮と疲労とで命を落としている一方で、大都市では富裕で豪奢な生活を送る者たち、すなわち労働によって何かを生み出すことをしない人々が「何の役にも立たず、しばしば最も有害」な奢侈に関わる産業と技芸にのみ投資しているために、あらゆる種類の有用な産業が死滅させられかねないという。当時の複雑な奢侈論争からすればきわめて素朴な奢侈批判と言えようが[16]、ロションはこうした「破壊的な効果を持つ害毒」を、若いマダガスカル人たちが祖国に持ち込むことだけはあってはならないと述べるのである。その上で、次のように書く。

> このようなヨーロッパは、何か特別に尊敬に値するようなものを持っているだろうか。地上の他の地域に住む人々を蔑視することが許されるとでもいうのか。自身、野蛮状態から脱したばかりだというのに、自分たちの習俗や法が尊重に値するというのだろうか（p.14）。

啓蒙の哲学自体への信頼はおそらくロションの中には揺るがずにあったろう。しかしヨーロッパ文明の現状は、とうてい非ヨーロッパ世界の人々に誇れるようなものではなかったのである。

---

16 18 世紀奢侈論争については以下を参照。森村敏巳「知られざる文人たちの奢侈批判― 1782 年ブザンソン・アカデミー懸賞論文―」、『一橋社会科学』、第 7 巻、2015 年 7 月。

第 4 章　「穏やかな植民地化」と「同化」

既述のように 18 世紀後半、フランス王権政府にとってはマダガスカルの重要性は高まり、本格的な植民地化が現実の課題として意識され始める。ここではまず当時の大ベストセラーの一つであるギヨーム＝トマ・レナールの『東西両インドにおけるヨーロッパ人の植民地拠点と交易の哲学的・政治的歴史』の第三版を見よう。

レナールは 1780 年のこの版でマダガスカルについての記述を大幅に追加している[17]。これは、様々な旅行記や回想録が書かれ、この島に関する知識が 1770 年の初版刊行当時と比較して増大したこともあるが、加筆された内容からすればこの島の植民地化への関心が高まったことも背景にあると言えよう。特に第一巻第四篇第五章でこの島の植民地化のあるべきかたちについて述べているが、レナールによれば、マダガスカルは先の七年戦争でフランスが失ったインドに比肩あるいはそれを上回る利益をもたらしてくれる豊饒の土地である[18]。マダガスカルはインド、ペルシャ、アラビア、アフリカそして中国で産出する特産品を生み出すことができ、そのために必要な「知的で柔和な」人間がこの島では「提供」されている。島南西部のサン＝トギュスタン湾、北東部のロキ（ルケーズ）、南東部のフォール＝ドファン、そして東部のタマターヴの 4 カ所に堅固な居留地を作れば、アフリカ、インド、ヨーロッパとの航行がスムーズになるのと同時に、ヨーロッパ列強に対抗する戦略上も有利になる。こうした記述からすれば、レナールを反植民地主義者とすることは難しい。同篇第四章ではマダガスカルの自然環境、農業生産物や鉱山資源、マダガスカル人の民族的特性や慣習、社会システムなどが解説されているが、それらは第五章でこの島の植民地化の魅力や可能性について読者を説得するための前提に過ぎない。

ただ注意すべきは、その植民地化の方法である。レナールが主張するのは、一言で言えば「穏和な植民地化（colonisation douce）」の推進であった。17 世紀までのフランス人を含むヨーロッパ各国が試みたマダガスカル植民地化が失敗した最大の理由は、ヨーロッパ人たちが行使した暴力にある。

---

17 Guillaume-Thomas Raynal, *Histoire philosophique et politique des établissements et du commerce des Européens dans les deux Indes*, Genève, 1780. 第二版まではなかった第一巻第四編第四章と第五章が第三版では追加されている。

18 Ibid., pp.414-415.

本来、力に任せて無理矢理土地を奪うようなことはしてはならない。人々を集めて持ち主のいない土地がどこかを聞いてそこを占有するか、持ち主がいるなら相応の対価でそこを買い取ればよい。第四章でマダガスカル人の間では所有権の観念が希薄であることを詳しく説明したのは、この第五章の記述のための仕掛けであり、暴力によらず「合法的に」土地を獲得しその主人となることを勧めている。レナールは「説得という穏和な道を通り、幸福という極上の甘い餌を用い、平穏な生活に惹きつけ、われわれの統治の利点を通して、われわれの産業を享受させ、われわれの特性が持つ卓越性を使って、島全体を両国にとって等しく有益な目標に導く」必要があるという[19]。

またレナールは「マダガスカル人の娘とフランス人コロンとの結婚は文明化の大きな体系をさらに一層前に進める」と述べて、フランス人との「混血」を推奨し「同一の地域で、同一の法の下に暮らす人々」の融和を強調する[20]。「穏和な植民地化」が現地住民の「文明化」を前提とする以上、それは通常同化主義に通じることを確認したい。さらに第五章の最後では次のような一文が見られる。

> 野蛮の恐怖から大勢の人々を引き離し、彼らに洗練された習俗や確実な統治、賢明な諸法、恵み深い宗教や有用で快適な技芸を与え、教化され、文明化された国民に育て上げることは、フランスにとって何という栄光だろうか！[21]

実はこの一文から始まるパラグラフはレナールではなく、ディドロの筆によることが明らかになっている[22]。18 世紀啓蒙に源流の一つを持つ「文明化の使命論」は、本来〈普遍〉を標榜し「同化」の可能性を胚胎するわけだが、これがナショナリズムという〈特殊〉と結びつく瞬間をここに見ることもできよう。いずれにせよレナールにとって、マダガスカルの植民地化は、フランスによる文明化と支配の利益をマダガスカル人に理解させる

19 Ibid., p.415.
20 Ibid., p.416.
21 Ibid., p.418.
22 訳者である大津真作による訳注を参照。ギヨーム＝トマ・レーナル『両インド史　東インド篇／下巻』、法政大学出版局、2011 年。373 頁。

ことでなされるはずであった。こうした主張はレナールやディドロのような書斎の哲学者だけのものではなかった。そもそも 1780 年版のマダガスカルに関わる加筆部分は、当時のフランスにおいては最も現地の事情に詳しい人物の一人モダーヴ伯爵（Comte de Maudave, Louis-Laurent de Fayd'herbe）の手記から影響を受けている[23]。

インドのカリカルの総督も務めたこの軍人は七年戦争後にフランス島に総督として赴任し、とりわけマダガスカル島の植民地化を推進した人物で、彼もまた「穏和な植民地化」を志向した。彼にとっては、マダガスカル人は「未開ではないが、依然として無教養な民族」であり、彼らはちょうど真の未開人と文明人であるフランス人の中間に位置する民族であるがゆえに、フランス人の持つ文明の優位性を容易に承認し、フランス人に対して自然と敬意を持ち、優れた統治と法の下で生き、近代的な利便性から利を得るために自ら進んで従属し、「やがてフランス国民の中に溶け込むことになる」はずであった[24]。文明化の先に「同化」を見据えるのはレナールと同様である。トリコワールは、1770 年代から特にフィジオクラートたちが暴力を否定し、「未開」ないし「野蛮」な諸民族の「文明化」に基づいた植民地拡張政策を推進したことを指摘した上で、実はモダーヴのマダガスカル植民地化計画がフィジオクラートの植民地主義のあり方に影響を与えたことを強調する[25]。

ロションもまた 10 ページあまりを使ってモダーヴの回想録を紹介している。しかし、ほぼ同じ時期に自身もマダガスカルに滞在しつつ、そこから 20 年後に『旅行記』を出版したロションは、1770 年代以降のマダガスカル植民地化の挫折を知っている。彼は植民地化の失敗という否定しようのない現実を確認した上で、モダーヴやレナール、フィジオクラートが称揚した「穏和な」植民地化の発想自体に疑義を呈しているように見える。モダーヴの失敗は、現地住民の幸福と教養を第一に考えなかったことによると批判した上で、次のように書く。

現地住民と共に生活するとすれば、それは兵士ではなく、職人や農

23 Tricoire, op.cit., p.93.
24 Ibid., pp.91-92.
25 Ibid., pp.92-93.

> 民、よく働き教養のある人間であるべきだ。未開人がヨーロッパ人と結ぶ協定は、あらゆる点で、子どもが教養ある人間と結ぶ約束事と同じようなものになっていることを忘れるべきではない。事実、現在にいたるまでマダガスカル人との間に結ばれた協定は明らかにこの種のものなのであり、島の人たちの利益に反するような協定をごり押しすることは明らかに不当だろう。ばかばかしいほどの空約束を価値あるものだと主張するのは、愚かで悪質な心情を持つ人間だけだ。あなた方は策略を用いて、われわれからみれば外国の土地に住む信じやすい住民たちから無理矢理土地を奪い取ったのだ。彼らはあなた方を善意と寛容をもって受け入れたわけで、自分たちが直面することになった危険を予想しなかった。その彼らの利益に反するかたちで、彼らに恩恵を施すという。だからこそ自分たちには、彼らを苦しめ、自分たちの支配のもとに彼らを隷属させる権利を有しているという（pp.99-100）。

『旅行記』は必ずしも論理的な一貫性をもって緻密に組み立てられた著作ではない。その意味では慎重に判断すべきではあるが、ロションはおそらくマダガスカルの植民地化自体、つまりフランス人やヨーロッパ人による人や資源の搾取や奴隷を酷使したプランテーション経営はもちろん、とりわけその土地に住み着いて占有することを否定する。そもそもロションは『旅行記』の本編冒頭を次のように書き出している。

> 文明化された諸民族は、ヨーロッパ人の習俗や慣習を彼らが有していないという理由で自分たちが未開人と名付けた人々を、自分たちの支配下に隷属させようとする不当で野蛮な主張を持っている。〔中略〕ヨーロッパの文明国は、われわれの生活している土地がわれわれのものであるように、これらの未開人たちが生きている土地は彼らのものであるということを忘れるべきだっただろうか（p.2）。

レナールやモダーヴと同様に 17 世紀までの植民地化が伴った暴力への批判はロションも共有するが、彼らが推進する「穏和な」植民地化にもロションは否定的だったと考えるべきだろう。モダーヴは「われわれはただ

彼らの先頭に立ち、われわれの目的と利益にしたがって彼らを導くことだけを考えればよいのだ」と明言し「マダガスカル人への支配の拡大」の必要性を力説するわけで、違いは明らかだろう[26]。ではどうあるべきなのか。繰り返しだが、ロションが一貫して主張するのは対等な「交易」である。ロションはヨーロッパの先進的な「産業」と「技芸」を持ち込むことこそが、マダガスカルにおける「文明化」だと考えていた。そしてその対価として、この島が持つ豊富な生産物や鉱山資源をヨーロッパ、フランスが得られると主張していた。綿布の製造技術に長けているインド人の入植と、交易のための港湾整備を伴う「商館」の設置を除けば、『旅行記』の全編を通して、マダガスカル人の土地の領有とそこへの入植を主張することは一度もないのである。

もう一つ指摘しておくべきことがある。繰り返すように、そもそもロションの「文明化」とはヨーロッパの先進的な産業技術の導入であった。むしろ精神的な面では、ヨーロッパの「文明」がこの地に持ち込まれることは慎重に避けなければならなかった。レナールと同様に、モダーヴも現地女性とフランス人、特に「あらゆる職種の労働者と職人」との結婚を植民地化に向けた重要な施策として提案するが[27]、2 人の著作を読んでいるはずのロションはフランスとマダガスカルの「混血」の可能性には一切触れない。この問題は別途慎重に論じるべきだが、彼が異文化の混交、慣習の異なる社会との同質化を懐疑的に見ていたことは明らかであり、この著作全体を見回しても、精神的、文化的、社会的な面での「同化」をいかなるかたちにせよ主張することは皆無なのである。

おわりに

ロションの『旅行記』を 18 世紀文学、思想史の文脈に位置づけるなら、彼自身が直接体験したことを除けば、その記述の大半は彼に先行する時期に書かれた 17、18 世紀の旅行記、回想録、歴史書ないし思想書からの引用のパッチワークである。全編にわたってルソー、とりわけ『人間不平等起源論』の影響は鮮明で、他にもアベ・ド・サン＝ピエールやフォルボネ

26 “Un rapport de Maudave”, cité dans Henri Pouget de Saint-André, op.cit., pp.20-21.
27 Ibid., pp.14-18.

らの経済思想、さらにシィエスの『第三身分とは何か』の影響も感じられる。現地マダガスカルとその近海に関する情報は、フラクールやスシュといった 17 世紀の著作はもちろん、ポワーヴルやモダーヴ、レナール、ベルナルダン・ド・サン＝ピエールらの著作から得ていた。ただこうしたパッチワークの仕方自体にロションなりの意図を読みとることはできよう。

『旅行記』においてマダガスカル人はほとんどの場合肯定的に描かれる。ただしこれはヨーロッパ人、フランス人の描写の反転でもある。ヨーロッパの文明は、「産業」と「技芸」における先進性を除くと、徹頭徹尾否定的に評価された。具体的には貧富の格差拡大と、富裕な階層による奢侈、労働を伴わないつまり生産性のない彼らの生活と、結果としての産業と農業の退廃が批判の対象になる。ヨーロッパによるマダガスカルの精神面での「文明化」は想定されず、「同化」はあってはならない。必然的に非ヨーロッパ世界の人々への植民地支配は、たとえそれが「穏和な」ものであれ「不当で野蛮」として否定されるのである。

トリコワールは「文明化」と「同化」をその構成要素とする「穏和な」植民地化が 18 世紀後半の啓蒙思想の一つの特徴であるとしつつ、世紀末のナポレオンによるエジプト遠征でここから「同化」の発想が消滅することを指摘する。その後、「人間の混交」にとりわけ好意的だった啓蒙の同化主義とは対照的に、特に第三共和政期の植民地政策が人種主義の教義と結託したことで「文明化の使命」は単なる正当化の道具と化すとまとめている[28]。フランスの栄光を誇り、マダガスカルの「原住民の知的、精神的改良」を支配のための手段と傲然と言い切る 20 世紀初頭のガリエニを想起すれば、トリコワールの整理は一見説得力を持つ。ただ、ロションもまた啓蒙の子なのである。「穏和な」植民地化からも一歩離れたところに立つ彼のようなスタンスもまた、啓蒙思想の系譜をなす無数の束の一つであろうし、これが消えていくとすればそれはなぜなのか、残るとすればそれはどのような理路を辿るのか、本稿をこうした探求につなげていく始点としたい。

28 Tricoire, op.cit., pp.97-98.